

ひきふね図書館

すべての人に読書の喜び を届ける場所



まだまだ知られていない 図書館サービス

読書の楽しみは、知識を広げたり、心を癒したり、豊かな人生を歩む手助けになります。図書館はそうした本と出合える場所です。

ご存知ですか？ 墨田区の図書館は1976年から障害者サービスを始めていることを。これは全国でも相当早く、先進的な取り組みとして高く評価されています。こうした図書館のサービスや取り組みをあらためて知っていただくため、墨田区の障害者サービスの立ち上げから携わってきた元墨田区職員の内山さんに、お話を伺いました。

「私たちは『図書館利用に障害がある方へのサービス』と、とらえています。一人ひとりが利用できない、読めないという状況は、利用者側の障害ではなく図書館側の障害なのだという考え方です。今では当たり前の考え方ですが、当時としたら先駆けだったと思います。だれでも足を骨折して入院したら、図書館へ行くことができなくなります。実はすべての人が図書館利用の障害になる可能性を持っています。けっして特別な人へのサービスというわけではありません」

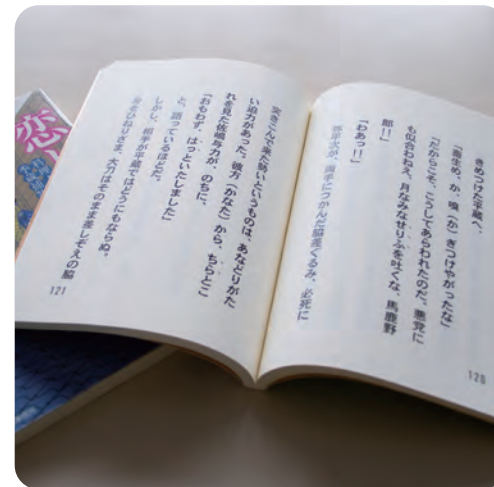
44年前に始めたときは、①図書館まで来られない方にはその方のところまで資料を届けよう。②視覚障害のある方が利用できる資料を用意しよう。

「利用者の一人ひとりの要望に応えていくのが、図書館の役割だと思っています」と山内さん。



山内さん(左) と太田さん(右)

この2つから始めたそうです。時代の流れとともに、録音資料(デジター図書)からマルチメディアデジター図書、電子図書などの新たな資料が登場しています。読むことに障害のあるさまざまな方たちに、さらに利用される可能性が広がっています。



上)『鬼平犯科帳』の拡大写本。小さい文字が読みづらい人のための本で、文字を読みやすい大きさに書き直しています。下左) 布の絵本。ボランティアが制作しています。下右) 墨田区のお知らせ「すみだ」も点字版があります。

誰もが使える図書館として 障害者サービスを考えたい

最近ではディスレクシア(読字障害・読み書き障害)などの発達障害が、社会に認知されるようになりました。本を読むのが苦手、指で文字をなぞらないとうまく読めないなど、生まれつきの障害のために読むことが難しい子どもたちが本を読む方法のひとつとして、マルチメディアデジター図書があります。パソコンやiPadの画面に文字が出てきて、文字を読んだ音声や画像も出てくる本です。読む速度や文字の大きさや色を変えることができ、自分のペースで自力で読書を行うことができます。

「子どもたちの障害はさまざまで、同じではありません。一人ひとり個性があり、読みたいジャンルや必要とする支援も違います。個々の子どもにあった読書の方法を、本人と相談しながら一緒に探っていきますので、図書館の受付でお気軽にご相談



本や雑誌をCDに録音したデジター図書



マルチメディアデジター図書は、テキスト・音声・画像の3つが同期しています。



録音室で音訳作業中のボランティア

ください。読むことが苦手な子どもに、一人でも多くマルチメディアデジター図書など様々な本にふれて、読書の楽しみを感じていただきたいです」と、ひきふね図書館職員の太田千亜生さんは話します。

実際にマルチメディアデジター図書を体験した子どもたちは、とても集中し表情が豊かになったそうです。ひきふね図書館では、ボランティアの皆さんとマルチメディアデジター図書の制作を手掛けています。



「誰もが使える図書館を目指したい」と太田さん。